

大きく変わってきた日本の森林

NPO 法人才の木・東京大学演習林 蔵治 光一郎

今日のトークカフェでは、日本の森林がどう変わるか、について、参加者のみなさんでトークすることが趣旨です。どう変わるかを考えるために、日本の森林がこれまでどう変わってきたのかを知っておくことは有益です。

日本の森林はこれまで大きく変わってきました。今日の話題提供では、日本の森林がどのように変わってきたのか、約 2000 年前までを振り返ります。特に、1873 年の地租改正、1897 年の森林法制定、1955～70 年頃までの拡大造林は、日本の森林に大きな変化をもたらしました。拡大造林により、日本の森林の約 40%は、木材生産を目的として針葉樹を人工的に植林した森林（人工林）になりました。かつて燃えるような紅葉の景色を見ることができたのに、今は季節感のない深い緑に覆われてしまった場所も少なくありません。

わずか 15 年で成し遂げられた大面積の樹種転換は、木材の生産で森林を支えていこう、という当時の社会的合意があったと解釈できます。しかしその後、人々が森林に求める価値は、短期間のうちに目まぐるしく移り変わりました。1980 年代には自然保護思想が台頭し、「木を伐ることは、悪いことだ」という考え方が急速に広まりました。1990 年後半からは地球温暖化が注目を浴びるようになり、その原因の一つである二酸化炭素を吸収する森林の機能に注目が集まります。この間、土砂崩れや水害を緩和する機能や、水資源を涵養する機能も大きな関心事であり続けました。1995 年以降は私たちのライフスタイルの変化などにより、木材の需要が減少傾向を示すようになりました。

これからの私たちのライフスタイルは、金銭、利便性、快適性といった 20 世紀型の指標では測れない、文化的、精神的、根源的な価値を求めて、今よりも豊かなものになっていくと思います。日本の森林に私たちが求めるものも、それに応じて変わってゆくでしょう。木材の生産だけで森林を支える時代は終わりました。これからは、木材の生産に加え、地球環境や地域環境、防災の観点も、文化的、精神的、根源的な観点も総動員して森林を支える時代になるでしょう。森林の所有者や木材生産の業界だけでなく、市民や行政、一般企業も加わって、森林に対する共通の価値が創造され、価値を求めて人々が行動し、森林も変わってゆくのではないのでしょうか。